

新しい授業づくりの文化をつくる

令和6年1月10日
「能力ベースの授業づくり実践講座」通信
第18号 齊藤先生実演授業④

■講座の目的

- ①未知の問題場面に出会っても、解決に向けて行動できる汎用的な力(資質・能力)を子供たちに育むため、学習指導要領に基づいた授業づくりについて実践を通して主体的に学ぶ。
- ②教師同士のネットワークを構築し、講座での学びを吹田市内で広げるとともに、自校でのOJTに生かすことにより、学習指導要領に基づいた授業づくりの文化を築く。

■講座の目標

令和6年度スタートにあたり、吹田市100%の教職員が学習指導要領に基づいた授業づくりを目指す。
「学習指導要領に基づいた授業とは・・・である」を自分の言葉で語る。

齊藤一弥先生の実演授業から学ぶ④

齊藤先生の実演授業から学ぶ研修会第4弾

今回は、中学校1年生国語科「ごんぎつね」(鈴木三重吉が書き直した作品)と「権狐」(新美南吉の原作)の比較読みを通して、表現の効果を追究する実演授業でした。

国語科「読むこと」の学習過程(プロセス)をご存じですか？

- ①構造と内容の把握
- ②精査・解釈
- ③考えの形成
- ④共有

上記のプロセスは単元のサイクルと1単位時間のサイクルの2層があります。実演授業では、1単位時間のサイクルで4つのフェーズを回す授業が展開されました。



学びのプロセスを可視化

本時の板書は左側に原作「権狐」右側に鈴木三重吉が書き直した「ごんぎつね」が配置されている。両側から中央へ板書が整理されることで、学び進んでいくべきプロセス、考えていくべきプロセスが、子供たちの中で潜在的に見えてくる。生徒たちが学び進める中で、教師側が学び進んでほしい方向に環境を整えていくことが大切である。

齊藤先生実演授業の詳細は裏面へ

国語科の目標【学習指導要領 第2章 第1節 1教科の目標】

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

Why

なぜ学ぶのか
子供達が身につけるべき資質・能力は？

What

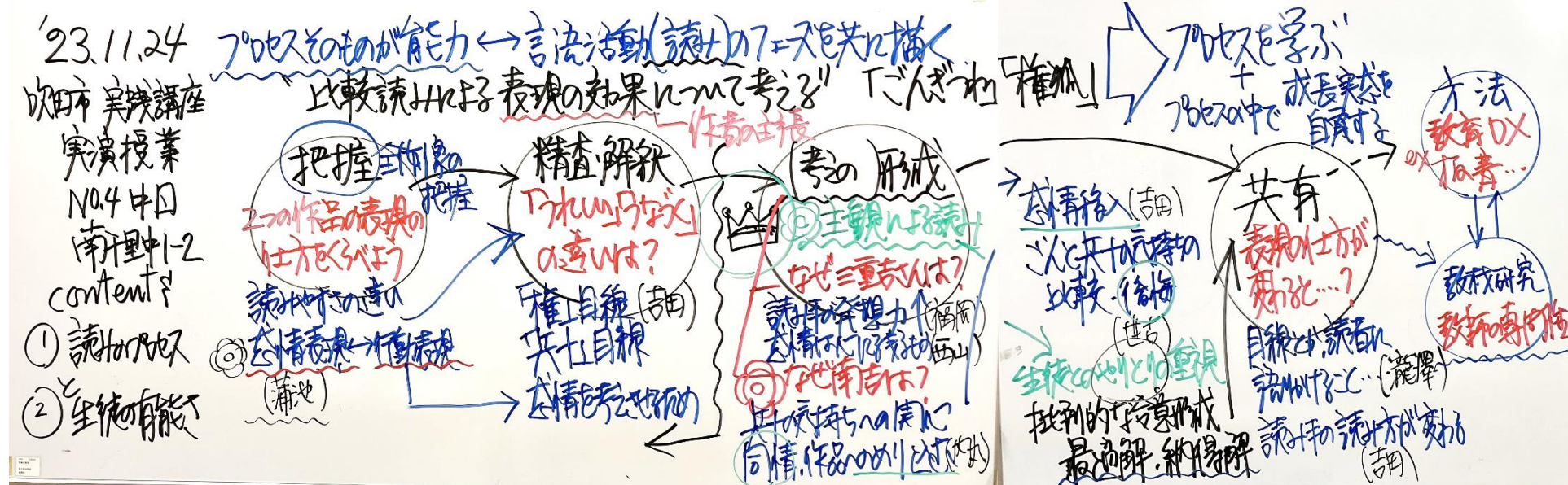
何を学ぶのか
子供達の学習対象は？

How

どのように学ぶのか
子供達の学習過程は？

「読みのプロセス」と「生徒の有能さ」

現行学習指導要領は、『能力ベース』。学習のプロセスそのものが能力だと言っている。
言語活動と読みのフェーズを共に描くことが能力を育てることにつながる。これを日常化していかなければならない。



「比較読みによる表現の効果について考える」 「ごんぎつね」(鈴木三重吉が書き直した作品) と 「権狐」(新美南吉原作)の 比較読み

鈴木三重吉は、有能な作品を排出する新美南吉に目をつけ、彼を表舞台に出したい思いから、作品に手を入れて児童文学雑誌「赤い鳥」に文壇に登場させた。
新美南吉の「権狐」は極めて生々しい、激しい表現のところがたくさん出てくる。鈴木三重吉は、そのまま児童文学雑誌に載せるわけにはいかないので、書き直しをして、三重吉なりの1つの考えの下、「ごんぎつね」を出している。
つまり、表現の効果について考えることは、作者の主張を考えること＝主題を考えることにもつながっていく。

1 単位時間で4つの読みのフェーズを回す

言語活動のフェーズは単元というユニットと1単位時間での2層になっている。
今日は、1単位時間で4つの読みのフェーズを全て回す授業を実演した。

① 構造と内容の把握

2つの作品の
表現の仕方を比べよう

齊藤先生「読み比べて
どんな気づきがあった？」
生徒①読みやすさの違い
②感情表現と行動表現
の違い

Kさん
最初の段階から感情表現について
書いていた。こういう生徒から学び
の歯車を動かし出し、次から次へと
連鎖反応が始まっていく。それらを
全て板書で拾っていく。
(表面板書参照)

② 精査・解釈

「うれしい」と「うなずく」の違いは一体何か？

「精査・解釈」では、「把握」で考えたことの原因所在をはっきりさせていく。
今日は、「うれしい」と「うなずく」の違いは一体何かという話題。

Yさん「原作(権狐)の方がごん目線で書かれている」
→「権狐」の最後の場面は、兵十の視点だが「ごんはう
れしくなりました。」でごんに視点が切り替わっている。
そこに教材の面白さがある。
Yさんはそういうことをうっすら気づいている。
齊藤先生「じゃあこっち(『ごんぎつね』)は？」
他の生徒「兵十の目線。」
Nさん「原作はうれしかったって書いてるから分かるけど、
書き直しの方は(感情を)考えさせられる。」
→Yさんが言ってくれた気づきの踏み台の上から次の
議論が展開される。
これが「生徒の有能さで繋いでいく」ということ。

③ 考えの形成

主観による読み 今回の改訂で「考えの形成」を言語活動のフェーズに入れたことが1番のポイント。
独りよがりの勝手な解釈でなく、叙述に即した上での考えの形成を進めたい。

齊藤先生「なぜ三重吉さんはわざわざ変えたんだろう。」
Fさん「読み手の発想力を伸ばしたい。」
Nさん「感情を子供たちが考えて心に残るものになる。」

齊藤先生「では、なぜ南吉は感情を書いたのだろうね。」
Uさん「感情を書いた方が同情しやすく作品にのめり込める。」
Yさん「感情移入がしやすい。」
→「同情を駆り立てて、感情移入をする」という解釈はすごく水準が高い。

Sさん「ごんと兵十の気持ちが比べられるから。うれしいと後悔の気持ち。」
生徒「兵十の気持ちを考えさせたいんだ」
→「ごんはうれしくなりました」と表現している理由は、兵十がその状況をどう思うかというこ
とを考えさせたいからだと言っている。文学の研究している人たちの論文に出てくるようなレ
ベルでの議論をしようとしている。

三重吉の表現

作者の主張を考える

南吉の表現

④ 共 有

表現の仕方が変わるとはどういうことか？

齊藤先生「いろんな視点から
表現の仕方を比べてどう？」
Tさん「目線とか、読者に語りかけるのが違ってくる」
→表現の仕方が変わることによって、目線や読者に語り
かけることが変わってくると言っている。
Yさん「読み手の読み方が変わる」
齊藤先生「みんなはどう？」
生徒「うなずく」
→最適解、納得解を求め続ける一連のプロセスに1つ、
終止符が打たれた。

生徒が学んだことは何か？

今日の生徒は、プロセスを学んでいた。能力ベースは、プロセスを生徒が回すことを期待している。しかし、最初から回せるものではないので、小学校高学年ぐらいから、言語活動のフェーズをたどることに慣れていきたい。それを踏まえた上で、中学生では、もう少し視点の高い仕事をしながら、プロセスの価値を体験していってほしい。
そのプロセスを学びながら、成長実感を自覚する。今日は、時間が切れたので確認しなかったが、「4年生の時にごんぎつねを勉強したけれど、あの時のごんぎつねと、今日読んでみた権狐とでどう変わった？」と問いかね、自分たちで学んだことが自分たちを成長させていることを実感させていきたい。その実感が彼らの底力となって、これからの学びそのものを押し進めていくことにつながる。

教師の専門性

「一連のプロセスの中で、どういう学びがそこに組織されるか」について考えることが教材研究になる。これが教師の専門性として非常に重要なもの。
板書か、PCかという議論もあったが、それは目的ではなく方法。だから、何をを使うかは、より効果的なものを選択することをおすすめしたい。大切なことは、私たちが教師の専門性を自覚してそこに軸足を置くことができるかどうか。—これがこれからの時代の教育の中で問われてくることではないか。

- シリーズで受講することで、これから大切にすべきことがはっきりしてきた。本日の子供たちは、答えが決まっているところでは挙手が多く、正解のない場面では挙手が少なく感じた。齊藤先生の授業では、普段発言しない子も発言していたと聞き、普段から能力ベースの授業を進めプロセス志向で評価することの大切さに気づいた。(S先生)
- 把握→精査・解釈→形成→共有・・・が保健体育にどう活用できるか考えてみたい。(F先生)

【編集後記】子供たちの発言を聞いて、自分自身のごんぎつねの読みが更新された。まさに子供は有能であることを体感した50分間。きっと子供たちも同じ気持ちだったと思う。この「実感」が子供たちの「底力」になる…そんな授業づくりを目指し、これからも学び続けたい。(文責：教育センター山塾)